

小 論 文

地域科学部

問 題 冊 子

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
2. 本冊子は大問

I

 ・

II

 の2問題および各問題の後に付した下書用紙の合計11ページです。
3. 試験中に、落丁、乱丁、印刷不鮮明、汚れなどに気がつき、解答にさしさわった場合には、直ちに試験監督者に申し出ること。
4. 受験番号は、4枚の解答用紙のそれぞれの指定された場所に、必ず記入すること。
5. 解答は、解答用紙の指定箇所に、正確な、読みやすい字で記入すること。
6. 解答用紙は、必ず提出すること。
7. 問題冊子は、持ち帰ること。
8. 大問ごとに、満点に対する配点の比率(%)が表示してあります。

I 以下の文章は、松本俊彦『誰がために医師はいる—クスリとヒトの現代論』(みすず書房, 2021年, 一部改変)の一部です。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(配点比率 50%)

2014年、私は立て続けに2回のテレビ出演をし、苦い挫折を経験した。いずれも半国营放送局の生放送の討論番組で、それなりに高い視聴率を誇っていた。ワイドショーでえげつない薬物事件報道が続くなか、意欲的なプロデューサーが、「厳罰一辺倒のわが国の薬物政策に一石を投じたい」と私に声をかけてくれ、それを意気を感じた私はいささか前のめりになって快諾したのだった。

1回目の出演は、その年の6月、超大物ミュージシャンが覚せい剤取締法違反で逮捕されたのを機に声がかかった。そして、その番組のなかで、私は薬物依存症治療を専門とする医師の立場から次のような発言をしたのだった。

「刑罰だけでは薬物問題は解決しない。覚せい剤取締法違反者の再犯率が高いのは、彼らの多くが薬物依存症という病気に罹患しているからだ。刑務所に入ったからといってその病気が治るわけではない。刑罰ではなく治療が必要だ」

何人もの押し出しの強い論客が出演する討論番組では、タイミングよく話に割って入り、端的に自分の意見を話すのは容易ではない。しかし、幸運にもその日はうまくいった。番組終了後、私はいいたいことを話し切った達成感から、上機嫌だった。

だが、それは自己満足にすぎなかったようだ。というのも、帰宅後すぐに番組のポータルサイトを覗くと、視聴者からのクレームが多数寄せられていたからである。曰く、「覚せい剤依存症は病気ではなく犯罪。百歩譲って病気だとしても、結局は自業自得、税金使って治療なんてするな」「あの医者は犯罪者を擁護している。頭がおかしい」「もっと厳罰化すべき。死刑にすればいい」……。炎上といってよい状態だった。

厳罰化？ 死刑？ 正直、目の前が真っ暗になった。そのサイトに書き込まれたコメントが日本人の総意というわけではないのだろうが、少なくともそのときには、日本人がみな一様にサディスティックなネトウヨのように感じられてしまった。

怖いと感じたのは、人々が刑罰の効果を無邪気に信じていることだった。何のための刑罰なのか、自分の頭で考えて発言している感じがまったくしないのだ。

思うに、刑罰には次の3つの機能がある。第1に、「威嚇」だ。「悪いことをすると罰を与えられて嫌な思いをするぞ。だから悪いことをやっちゃダメだよ」と威嚇することで、犯罪を未然予防する機能である。第2に、「応報」。犯罪被害者が個人的に「目には目を、歯には歯を」的な復讐をするのではなく、国が責任を持って刑罰を下し、被害者の応報感情に応える機能である。そして最後に、「再犯防止」。これは、犯罪をおかした人に矯正教育を施し、市民社会で再チャレンジする機会を与える機能である。

この3つの機能を「違法薬物の自己使用」という犯罪に当てはめて考えてみよう。

まず、「威嚇」。これには一定の効果があるだろう。「薬物を使うと、罰を受けて嫌な思いをす

るぞ]という威嚇は、確実に人々を最初の薬物使用を躊躇させる要因となっているはずだ。それは認める。

次に「応報」。違法薬物の自己使用の被害者は誰なのだろうか？「そのまま覚せい剤を使っていると、精神病状態を呈して深刻な暴力事件を起こすおそれがある」という懸念を主張する人がいる。しかし、実は薬物使用と暴力とのあいだには明確な蓋然性があるわけではない。たとえあったとしても、「おそれ」の段階では刑罰を与えられない。

「反社会勢力の資金源になり、間接的に市民生活が脅かされる」という意見もあるが、それも変だ。違法化するから、反社会勢力にアンダーグラウンドなビジネスの機会を与えてしまう。禁酒法時代の米国において、アル・カポネが密造酒で巨利を得たことを思い起こしてほしい。

では、この2つを除外して、薬物使用による第一義的な被害者は誰なのか？薬物犯罪はよく「被害者なき犯罪」といわれるが、あえて被害者を捜し出すとすれば、それは、自らの健康を害した使用者本人であろう。

それでは最後、3つ目の機能、「再犯防止」についてはどうだろうか？法務省のデータを用いた、千葉大学の羽間ら、および国立精神・神経医療研究センターの嶋根らによる2つの研究は、薬物使用者は刑務所により長く、より頻回に入れば入るほど、再犯リスクが高まること、そして、刑務所服役のたびに依存症の重症度が進行することを明らかにしている。これらの知見は、薬物自己使用者の再犯防止には、刑罰が有効ではないどころか、かえって妨げになっている可能性を示唆している。

こういいかえてもよい。違法薬物の自己使用に対しては、刑罰は本来期待されている3つの機能のうちの1つしか効果を発揮していないのだ、と。それにもかかわらずさらなる厳罰化を望む^(a)のは、科学(サイエンス)よりも迷信(イデオロギー)を重視する態度を表明することに他ならない。

(中略)

最近、私は、文部科学省から依頼され、全国高校生薬物乱用防止ポスターコンクールの審査員を引き受けた。私は絵心などまったくないが、薬物依存症の専門家ということで審査員就任を要請されたのだ。

要は、文部科学大臣賞に値するポスターを選考するわけだが、これがまた退屈な仕事だった。どのポスターもあまりに画一的かつ没個性的、どれもこれもがコピーしたように似ているのだ。本当にこの作品が地方予選を勝ち抜き、各都道府県で知事賞に輝いた作品なのかと訝しく思った。というのも、ポスターに描かれてあったのは、そろいもそろって、目が落ちくぼみ、頬がこけた、ゾンビのような姿の薬物乱用者だったからだ。そして、いずれの乱用者も両手に注射器^{いぶか}を握りしめ、口角から血の色のよだれを垂らしながら、いままさに背後から子どもたちに襲いかかろうとしていた。

まるで戦時下の風刺画だった。つまり、敵国の人物を意図的に醜悪な「悪人」風に描くことで、人々の無意識に嫌悪感を刷り込むやり方だ。学校の薬物乱用防止教室で一体何を教えているのかが、ありありと想像できた。

やはり専門家としてくりかえしておかねばならない。ゾンビのような薬物乱用者など存在しない。少なくとも子どもたちに薬物を勧めるくらい元気のある乱用者は、たいてい、かつこよく、健康的に見える、「自分もあんなふうになりたい」と憧れの対象であることが多い。外見は、ゾンビよりも EXILE TRIBE のメンバーに近いだろう。

だから子どもたちは油断してしまうのだ。しかも、彼らは、これまで出会ったどんな人よりもやさしくて、真摯に自分の話に耳を傾け、はじめて自分の存在価値を認めてくれた人、自分にとって一番大切な人だ。そんな人が、手を差し伸べてこういうのである。

「友だちになろうよ」

薬物を勧められた際に「ノー」といわないのは、当然ではなかろうか？

子どもたちを守れないだけではない。そうした予防教育が、薬物依存症を抱える人たちに対する偏見や差別意識、あるいは優生思想的な考えを醸成する下地を作っていないだろうか？そしてその結果、薬物依存症者の回復が妨げられ、障害を抱えた人との共生社会の実現を阻まれてきた、という可能性はないだろうか？

単に効果がないだけならばまだいいが、それではすまされない可能性もある。私は、かつて少年院で出会った一人の少年の言葉がいまでも忘れられない。

「中学時代、薬物乱用防止教室で警察の人が講師で来て、「覚せい剤やめますか、人間やめますか」とくりかえしていた。つらかった。当時、父親は覚せい剤取締法で逮捕され、刑務所に入っていた。「俺の父親は人間じゃないのか。だったら、子どもの俺もきつと人間じゃないな」と思った。それで自暴自棄になって、自分から不良グループに近づき、自分から求めて覚せい剤に手を出した」

もちろん、彼のような生徒は学校ではごく少数派であろう。だが、わが国ではそのような子どもこそが薬物乱用ハイリスク群なのだ。

「ダメ。ゼッタイ。」

この、妙に語呂のよいキャッチコピー、もともとは国連が提唱した「Yes To Life, No To Drugs」に由来する。直訳すれば、「人生にイエスといおう、薬物にはノーといおう」、たとえ超訳するにしても、せめて「自分を大切に、でも薬物はダメ。ゼッタイ。」程度にとどめるべきだった。ところが、なぜか「Yes To Life」が省略され、試験ならまちがいなく誤訳と見なされるレベルの日本語「ダメ。ゼッタイ。」として普及してしまったのだ。

いま思えば、ボタンの掛け違いはそこから始まった。この誤訳のせいで、わが国の薬物対策は、自分の「人生にイエス」といえない人、生きづらさや痛みを抱えて孤立する「人」たちへの視点を失ってしまったからだ。その結果、対策は、痛みを抱え孤立している「人」の存在を無視し、

もっぱら薬物という「物」の管理・規制・撲滅に特化したものとなってしまった。

行き過ぎた予防啓発は新たな差別・偏見を作り出す。現在、新型コロナウイルス感染予防の気運が高まるなか、各地で感染者や医療関係者の家族が迫害され、他県ナンバーの車を排斥する運動が勃発しているのは、その好例だ。それから、かつて「無癩^{らい}県運動」(*)がハンセン病に対する差別・偏見を強化し、感染者の排除や隔離といった人権侵害を引き起こした、というわが国の黒歴史も忘れてはならない。そして同じ文脈で、いま「ダメ。ゼッタイ。」が、薬物依存症者を孤立させ、彼らを回復から遠ざける呪文となっている。

だから、私は機会を捉えてはくりかえしこう主張しなければならない。

「ダメ。ゼッタイ。」では、絶対ダメだ、と。
(b)

※ ハンセン(=癩^{らい})病は感染力が強い、というかつての誤った考えは患者に対する偏見と隔離を助長してきた。1929年、ハンセン病患者のいない県にしようというスローガンを唱え、官民一体となってハンセン病患者摘発や療養所への収容を行った運動のこと。

問 1. 筆者が、下線部(a)「厳罰化を望むのは、科学(サイエンス)よりも迷信(イデオロギー)を重視する態度」と考えるのはなぜか。世間の処罰感情と専門家の見解を本文の内容に即して説明しなさい。(200字程度)

問 2. 下線部(b)「『ダメ、ゼッタイ。』では、絶対ダメだ」という筆者の主張を踏まえ、誰も排除しない社会をつくるには何が大切なことになるのか、あなたの考えを論じなさい。(400字程度)

下書用紙(2)

I 問 2.

(400 字程度)

5	10	15	20		
				(100 字)	
					(200 字)
					(300 字)
					(400 字)

Ⅱ 以下の文章は、ベン・グリーン『スマート イナフ シティ』(中村健太郎・酒井康史訳、人文書院、2022年、一部改変)の一部です。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(配点比率50%)

この部分につきましては、著作権許諾の都合により公開しません。

この部分につきましては、著作権許諾の都合により公開しません。

この部分につきましては、著作権許諾の都合により公開しません。

問 1. 筆者が述べる「テック・ゴーグル」の意味を説明し、これが私たちのものの捉え方に与える影響について、簡単に説明しなさい。(200 字程度)

問 2. テクノロジーを都市生活に導入することについて、本文の内容を踏まえた上であなたの意見を述べなさい。(400 字程度)

(地域科学部・後期日程)

下書用紙(3)

II 問 1.

(200字程度)

	5	10	15	20	
					(100字)
					(200字)

(地域科学部・後期日程)
下書用紙(4)

Ⅱ 問 2.

(400字程度)

	5	10	15	20	
					(100字)
					(200字)
					(300字)
					(400字)